

2) イサザ産卵調査結果

片岡佳孝・孝橋賢一

【目的】イサザ資源は、平成5年から7年にかけて漁獲量が1 tに満たない低資源状態は脱した。平成8年31 t、9年161 tと回復してきた漁獲量は、平成10年は86 tであり、まだ不安定な状態である。そのため、資源動向を把握しておく必要があり、イサザの産卵場所として最も良いとされる海津大崎において、産卵ピークを中心とした産卵状況の調査をおこなった。

【方法】イサザの産卵期に相当する4月下旬から5月上旬にかけて、マキノ町海津大崎地先で、潜水目視観察による産卵状況調査を行った。調査は3回（4月21日、5月7日、5月21日）行い、1回目は予備調査とした。湖岸から沖に向かい、1本30mロープを3本引き（NO. 1、2、3とする）、その両側1mに沿って産卵親魚数、産卵床数（親魚とともに卵塊が確認されたものを産卵床とした）を記録した。

【結果】

4月21日の調査では、NO. 3のトランセクトしか観察できなかったが、親魚数24尾、産卵床4が確認された。調査地点の湖岸水温は14℃であった。

5月7日の調査（図1）では、NO. 1～3の合計で親魚65尾、産卵床26が確認された。産卵床は、NO. 1の水深1～1.5の浅所に集中していた。水温は14.8℃であった。糸状藻類の繁茂が認められたが、浮き石と浮き石の間を埋めるほどには繁茂していなかった。そのため、イサザの産卵を妨げるような状態ではなく、産卵床も保たれていた。また、発眼卵が認められた。

5月21日の調査（図2）ではNO. 1～3の合計で親魚13尾、産卵床2が確認された。糸状藻類の繁茂が顕著となった。糸状藻類の繁茂していない場所は、岸から沖へ向かって4 mまでであった。水温は18℃であり、イサザの産卵する水温から考えると高くなった。産卵床は、3～4mの沖側のみとなった。適産卵水温や産卵親魚、産卵床数から産卵はほぼ終了したと考えられた。

NO. 3の経時変化をみてみると4月21日では産卵床4から5月7日10、5/211と変化していることから5月上旬にピークがあったと考えられた。

今回の調査では、水深1～1.5mの浅所に集中した産卵が認められた。産卵床に良好な浮き石が多数存在していたが、このような状態を作り出すのは水の動きである。イサザの産卵床は水底にあり、一見水位の変動の影響を受けないように見える。しかし、水位の変動により、底石のうける水の動きは変化すると思われる。それにより、産卵場の状態も常に変化していると思われ、イサザの産卵にも少なからず影響している可能性がある。

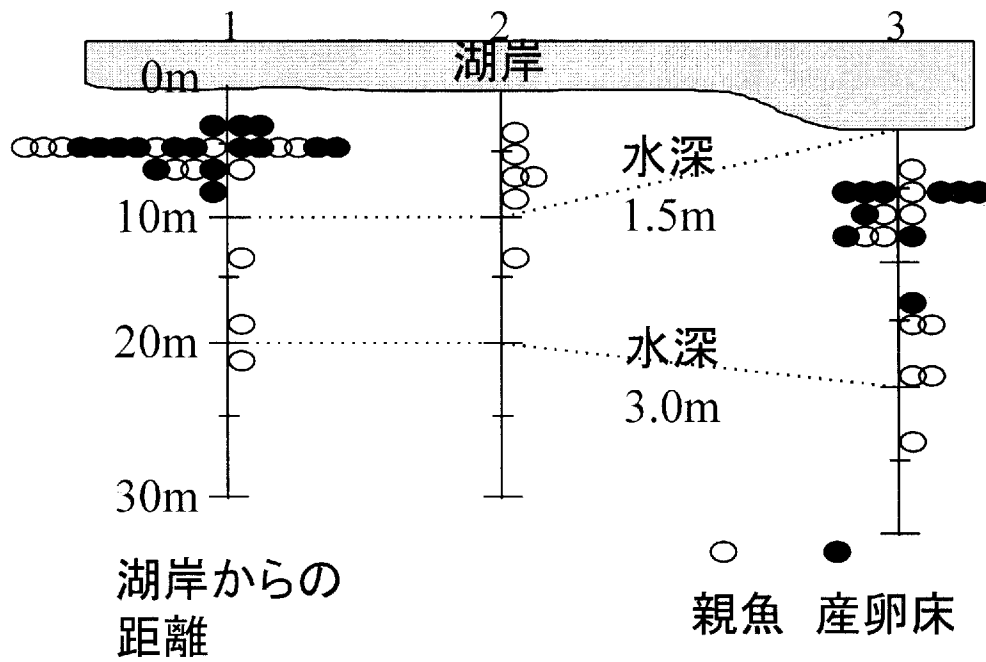


図1 産卵床分布図(5月7日)

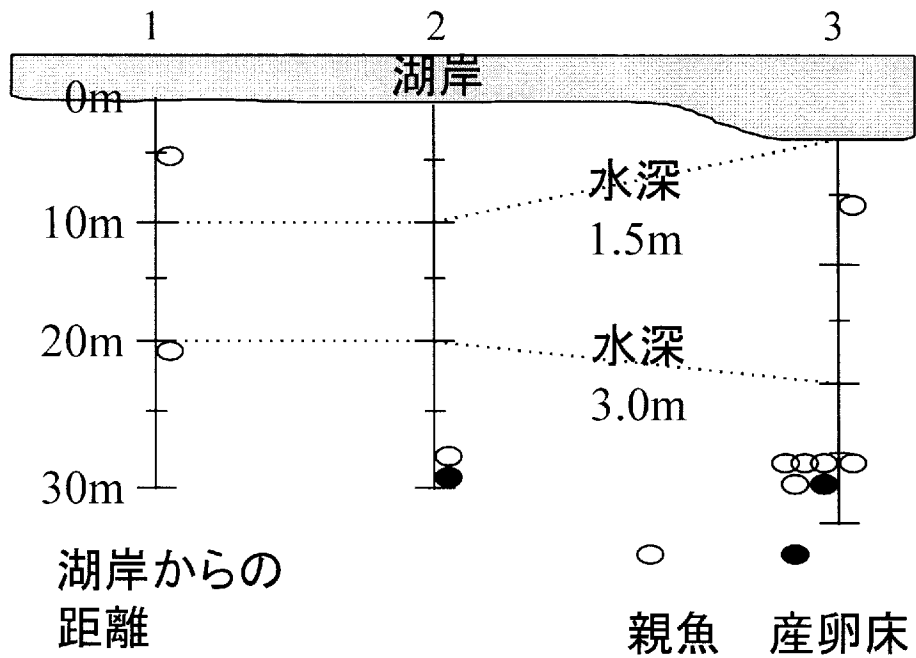


図2 産卵床分布図(5月21日)